

# 源氏物語における宇治十帖の死

— 悲しみの連鎖 —

はじめに

『源氏物語』の中で死んでゆく者は四十人以上に達する。その死に顔は大変美しく、明かりの中で生きているかのように照らし出される。まだ、生きているのではないか、そんな幻想さえも抱かせるように死は描かれる。そして、その死は、なかなか受け入れられることが出来ず、時が過ぎ行く中で、人々はようやく死を受け入れようとしていく。

今までの『源氏物語』の「死」についての研究は多岐に渡り、様々な視点から「死」というものが考えられてきた。「死」と一言で言っても、その内容は実に様々で、息絶えた時、葬送、そして、思い出と三段階に分けることができる。

息絶えた時を見ていくと、岡崎義恵は、「物のあはれ」による美

塩 見 優

を指摘している<sup>①</sup>。また、石田穰二の「源氏物語における四つの死——歌語のことなど——」が有名な論文としてあげられる。息絶える描写に、歌の影響を見、恣意的な感情移入や解釈の入れない、新たな意味づけをしている。そこに死者の感傷や人生を読み解く<sup>②</sup>。だが、考察がなされているのが四人しかなく、他の者たちとの比較はなされていない。

「死」を色彩から考えるという点においては、伊原昭の「源氏物語の美——死にかかわる描写をとおして——」に「死者」の色彩描写についての指摘がある。死者の肌の色、髪の色、衣の色に注目をし、その美しさについての考察をしている<sup>③</sup>。

歴史上の死描写と比較を行ったのは、田中隆昭の「源氏物語における死・葬送・服喪の表現」である。死の表現を抜き出し整理し、身分相応の死の表現を述べる。だが、この論文で注目すべきことは、

葬送の「煙」について、実に多くのページが割かれていることだ。火葬の際に出る、煙の表現に着目し、その思想の大本となる表現を考え、「煙」になるといふ考えが伝統的表現であるといふことを、順を追って指摘し、最後に服喪について触れており、その色彩による差異、歴史上の人物とあわせて考えることで、色彩から、その死の場面での悲しみを考える<sup>(4)</sup>。

だが、以上の論文は死者の美しさに焦点があてられ、それを見る生者の視点や気持ちというものには、ほとんど触れられていない。

本論では、『源氏物語』の宇治十帖の死の描写、および葬送の描写にまず着目し、生者の感情や死者の感情に注目しながら、正編の死の受け止め方もあわせて考えていきたい。誰の視線を通して悲しみは描写されるのであろうか。また、生者はどのようにして悲しみを、寂しさを紛らわしていくのであろうか。その点に焦点をあて、考察する。

## 一 八宮

宇治十帖における第一番目の死者は八宮である。八宮は、早くに妻を亡くし、一人で宇治の姉妹を育てていた。姉妹にとつて唯一の頼るべき存在であり、その親子の絆はとても強いものだった。

しかし、八宮の死と葬送は宇治の姉妹の見守る中で行われたわけ

ではない。以下、八宮の死と葬送の場面を見ていきたいと思う。

阿闍梨、年ごろ契りおきたまへるままに、後の御事もよろづに仕うまつる。  
(椎本・五・一八九)

八宮の葬送は、前々から約束された通りに僧たち主催で進んでいく。事務的ともいうように、型どおりに葬送は進められていった。この場面では、二人の残された宇治の姉妹はただただ悲しみにくれ泣き沈み、葬送の中では、「あまりさかしき聖心を憎くつらしとむむ」(椎本・五・一九〇) 思うのである。後見がない姫君たちは父の死に目に会うこともできず、涙を流すことしかできないのであった。見る目の前にて、おぼつかならぬこそ常のことなれ、おぼつかなさそひて、思し嘆くことことわりなり。

(椎本・五・一八九)

八宮の死の場面にさかのぼってみると、その死の際には、側に血縁の者は誰もいなかったと書かれている。宇治という地で、娘にも看取られることなく亡くなっていく八宮の描写からは、寂しく、孤独であったであろう彼の人生の終焉がうかがえる。

この葬送の場面には、正編の紫上や藤壺のように、人が集まる様子や参列者の悲しみが描かれない。それにより、ひっそりと、人知れず死んでゆく八宮像というものが浮かび上がってくるのである。

だが、死にゆく八宮自身は寂しいという感情を持って死んでいっ

たわけではない。

入道の御本意は昔より深くおはせしかど、かう見ゆづる人なき御事どもの見棄てがたきを、生ける限りは明け暮れえ避らず見たてまつるを、よに心細き世の慰めにも思し離れがたくて過ぐいたまへるを、限りある道には、先立ちたまふも慕ひたまふ御心もかなはぬわざなりけり。

(椎本・五・一九〇)

残していく姉妹のことが気になり、「入道の御本意は昔より深く」あるのだが、八宮はなかなか出家に踏み出すことができなかった。その未練の思いは死の間際まであり、「すこしもよろしくならば、いま、念じて」(椎本・五・一八八) 娘たちに会いたいと阿闍梨に話すほどであった。だが、阿闍梨は、「人はみな御宿世といふもの異々なれば、御心にかかるべきにもおはしません」(椎本・五・一八八)と姉妹への懸念を運命と思い、受け入れて下山することはしないようにという言葉を八宮にかけ論すのであった。その結果、八宮は下山することなく死んでいった。

八宮は、その死の瞬間まで、残して行く姉妹のことを心配していた。周りから見れば寂しい葬送だったのかもしれない。しかし、実際は、阿闍梨や僧たちの見守る中で死んでいったのである。それを考えても、血縁がおらず、多くの僧が祈りをあげる中で死んでいく八宮の心は寂しく満たされることがなかったのではないか。

だが、八宮の葬送を包みこむ寂しさは、死者そのものの感情だけではない。それは、八宮の葬送が宇治の姉妹の視点から描かれていることが一番大きな理由であろう。宇治の姉妹は父の亡骸さえ見ることができなかった。父は帰ってくると姉妹は思っていたのである。だが、「かの行ひたまふ三昧、今日はてぬらんと、いつしかと待」(椎本・五・一八七) っていると山寺から使者が来て、八宮が帰って来れないことを告げる。父や僧たちの世界から切り捨てられ、疎外された宇治の姉妹は感じ、そう信じてしまったのである。容態も解らず、不安な心に包まれた中で八宮の死であった。寂しい心は、まさに宇治の姉妹の心そのものだったのである。誰も来ない葬送は、後見のいない姉妹の象徴であったのだ。

## 二 大君

大君の死は八宮の死の翌々年であった。彼女は薫の愛する女性であった。大君の死は、薫の視点によって描かれる。その描写を見ていく。

腕などいまと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひも変わず、白うつくしげになよなよとして、白き御衣どものなよびかなるに、衾を押しやりて、中に身もなき雛を臥せたらむ心地して、御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやら

れたる、枕より落ちたるきはの、つやつやとめでたうをかしげ  
なるも  
(総角・五・三三二六)

臨終の大君の描写である。挙げたものはその一部で、大君の死はその臨終までの長さ、臨終後の長さにおいて際立っている。腕、肌の色、髪と目に見える部分はすべて薫によって描写されている。その様子は「雛」のようだと形容されるほど痩せおとろえ、もう動けない様もうかがえる。その中で、大君は死んでしまふのである。薫の見た大君は美しい姿であった。

中納言の君は、さりととも、いとかかることあらじ、夢かと思して、御殿油を近うかかけて見たてまつりたまふに、隠したまふ顔も、ただ寝たまへるようにて、変りたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを  
(総角・五・三三一九)

死んだ大君の死に顔は、薫により、御殿油をかかけてまじまじと見つめられる。その死に顔は、「寝たまへるよう」に美しい。まだ生きていような気がして、死んでいるのか生きていのか分からない感覚に陥っていく。これまでも「雛」のように彼女は臥していた。だからこそ、死んでしまった今もまだ「雛」のように臥しているだけではないかという思いが浮かぶのである。だが、彼女は死んでしまっている。それだけは間違いないのである。

ひたぶるに煙にだになし果せてむと思ほして、とかく例の作法

どもするぞ、あさましかりける。

(総角・五・三三一九)

悲しい気持ちを抑える事ができないので、もう茶毘の煙にでもしてしまおうと葬送を薫は決意する。しかし、「煙多くむすばれたまはずなりぬるもあへなし」(総角・五・三三三〇)とあつけなく煙は消えてしまふ。もつと一緒にいたいと思う気持ちが、煙を少なく見せ、あつけなく薫には見えたのかもしれない<sup>(5)</sup>。あまりにも早く消えていってしまふ煙がはかなく寂しいと、そういう印象を残す。はかない煙は、人の心にもあまり残らない。多くの人の目にふれず、さつと消えてなくなってしまったのである。

この葬送場面で涙するものはいない。その代わりに、彼女の死はすべて薫の視点から描かれる。女房が臨終後の大君の髪をかきやり、その匂いは生きていた時そのまま、懐かしいと思う場面などが象徴的に描かれている。死に顔はとも印象的で、匂いまでもが描写される。生きていようなのに彼女は死んでいるのである。大君の死の場面は悲しみの表現は出てこない。だが、薫の視点から描かれることで大君への想いを強調し、静かな、何者にも変えがたい悲しみを表現しているのである。そして、彼は大君を思いこのような歌を詠む。

恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし

(総角・五・三三三三)

いっそのこと死んでしまいたいと、そう述べる。涙がただ流れるわけではない。ただ「胸よりあまる心地」(総角・五・三三三)がして悲しくて、いられないのである。泣くよりも辛い悲しみである。いなくなつた寂しさは、泣くことではおさまらない。自分の胸に何かほつかりと大きな穴が空いたような、今まであつたはずの何かが急に消えてしまったような、そんな感覚なのである。

どんな風景を見ていても、大君を思い出してしまふ。ここにあの方がいたら、という思いは胸を支配する。大君の死後の回想の場面も、ほとんどが薫の視点によって描かれる。そこまで全て通して見ていくと、薫がどれだけ大君が好きだったのかということが分かる。そして、その愛する者に死なれた悲しみは、誰かと共有することなく、薫の中に留まるのである。

### 三 悲しみの連鎖

誰とも悲しみを共有できない薫は、いつしか形代を探し始める。神田龍身は、大君の死の場面を、人形愛になぞらえ、薫の屍体愛について触れ、薫は大君の死に顔を見つめる場面で初めて、大君を手に入れたとする。そして、その節の最後にこう触れている。

また一方、薫がここで「かくながら、虫の骸のやうにても見るわざならましかば」と火葬せずに遺体をそのまま見守りたいと

言っているのも注意される。薫の骸を求めての彷徨は、これからもつづくことであろう。

薫は、火葬をしたくないと述べるのである。<sup>(6)</sup> 正編で、光源氏は、紫上の時も、藤壺の時も、どの女君の時でも、ここにあるような薫の感情は持つていない。紫上は、藤壺の死後に彼女の代わりとして扱われる形代としてではなく、藤壺に似た人として扱われてきた。だが、薫は、大君の代わりではなく、彼女自身と違いのない、同じ人間を、常に誰かに求めてしまうのである。形代を求める薫によって物語は進んでいく。死者は死者では終わらないのである。悲しみは普通の悲しみとはズレていき、ただ、涙を流すことで悲しみを昇華できなくなっていく。

かの人も思ひのたまふめるやうに、いにしへの御代わりとなず  
らへきこえて、かう思ひ知りけり、と見えたてまつるふしもあ  
らばや。  
(早蕨・五・三三九)

大君死後の薫にとって、中君は「いにしへの御代わり」なのである。薫はいつまでも、「大君の形見」を求め続ける。涙を流し、別の人との恋を思い描くことはしない。薫の悲しみは、形代という連鎖を引き起こしていくのである。そして、その形代を、最後まで薫は見つけることはできないのである。

このように考えていくと、薫もまた、八宮の代わりであつたこと

に気付く。「亡からむ後、この君たちをさるべきものたよりにもとぶらひ、思ひ棄てぬものに数まへたまへ」（権本・五・一七九）と八宮は娘を薫に託して逝ったのである。これは、婿としての意味もあつたであろうが、薫に父・八宮としての役割を頼み、代わりとして生きることを願ったのである。

以上のことから解るように、宇治の死は、後の連鎖を引き起こすのである。もし、八宮が薫に後見を頼まなければ、薫は宇治に行かなかつたかもしれない。だが、後ろ見を頼まれたが故に、彼は何度も宇治に足を運ぶこととなる。そして、大君に恋をし、彼女の死後、また代わりを探すのである。この点が正編との差異といえるのではないだろうか。

正編において、桐壺更衣から藤壺への「ゆかり」の系譜は確かに形代としてつながっていった。だが、最も重要な藤壺、紫上という系譜は生きている者によってつながっていく。しかし、宇治十帖の系譜は違う。「ゆかり」の元となる人が死んでからつながっていくのである。そのため、悲しみは次の「形代」へと移っていく。そこでは死者は、まだ死んでいない。新たな人の中で、死者はまだ生きているのである。

そして、物語は、ついに「死者」を隠蔽してしまう。浮舟の失踪こそが、死者の形代の連鎖を止める物として描かれるのである。

#### 四 浮舟の失踪

『源氏物語』最後に描かれる葬送は、浮舟の葬送である。彼女の葬送は死体がないという大変特殊な状況で描かれる。もちろんそれは入水自殺（と考えられた）であつたことが大きく、亡骸がないことを隠し、世間体などを考えた結果であろう。彼女の葬送の場では誰が涙を流すわけでもなく、ただ田舎人の噂が登場する。他の見たこともない全く関係のない人間の様子が描かれているのはこの葬送場面の大きな特徴ともいえる。浮舟の葬送は親しい他者の視点はとも少ない。もちろん死んだかどうか解らないことが一番大きな原因ではあるが、これは彼女の生まれた境遇を意識させると共に、親しいものは前の段階でとても嘆き悲しんでいるが、この時は描かぬことにより、悲しみの薄い、どこか寂しげな、印象を生み出してしまう。

いままでの葬送の方法とは違う浮舟の葬送の描き方は、他の人々のように、彼らの人生の終点を描かない。悲しみにくれる一人の視線によってとらえられるのではなく、様々な角度で死（失踪）は描かれる。泣き叫ぶ浮舟の母、そしていなくなったことに慌てる右近と侍従が描かれる。あわただしく動く死（失踪）の場面はいままでのように悲しみにくれた場面ではない。そのため、読者は彼女の

「死」を心に少しは留めるもののその慌ただしさにつられて先を読むように促されてしまふ。

前に述べたように、浮舟の「葬送」は失踪の重大さと、秘密の重大さを示唆し、この葬送の後にも続く未来へと読者に目を向けさせる。そのために、薫や匂宮本人の様子は描かれぬ。そして、その未来へと目をやらせる描き方こそが、浮舟が生きていたという手習巻への伏線であつたのだから。

それ故、この場面には、浮舟の身体も心も描かれない。失踪した彼女の心は遠くへと追いやられ、残されたものだけで物語は進行していく。そのため、彼女を思う未来は、明るいのか暗いのかまったく予想がつかないのである。

そして、死後の浮舟は自分の感情を自然に映し出すことになる。田中隆昭は、死者は煙になることよつて空へ溶け、自然へと帰つていくと述べる。<sup>⑥</sup>この浮舟の心情もまた、自然によつて描かれていく。天候に自分を重ね、彼女は人々に訴えていく。

浮舟巻に見られる、浮舟が出てくる場面の天候は以下のようになつてゐる。

① 有明の月澄みのほりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橘の小島」と申して  
(浮舟・六・一五〇)

② 風もことにさはらず、垣のもとに雪むら消えつつ、今もかき曇

りて降る。

(浮舟・六・一五二)

③ 雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いとど山路思し絶えてわりなく思されければ  
(浮舟・六・一五七)

④ かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばや  
(浮舟・六・一六〇)

⑤ つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまざりて  
(浮舟・六・一六一)

⑥ 暮れて月いと明し。有明の空を思ひ出づる涙のいとどとめがたきは  
(浮舟・六・一六五)

以上が、浮舟が登場する場面に出てきた天候である。①は匂宮と共に小島へ渡つた時の場面である。そこは雪が積もり、②徐々に空は曇り雪が降る。

その小島から帰つた後に匂宮と薫の両者から手紙が来て悩む浮舟は匂宮に消えてしまいたいと、どこへ行けばよいかわからないと④、⑤のような歌を詠む。⑥は母君や女房の間で自分の身元をどちらに引き取つてもらうかを悩み、昔を思い出し涙する場面である。この時の天候は、明るく輝く月なのである。明るい月は容赦なく浮舟の迷う心を照らし出す。そして、入水する直前の場面に天候は出てこない。

以上のことを見ていくと、前半は晴れた場面が多いのに対し、後

半は曇り、雨が降ると天候は崩れていく。匂宮との出会いにより、

にて来たれば

浮舟は薫と匂宮の間に挟まれ、悩む。①の橋の小島。ここから彼女の不幸は始まる。この場面は、まだ状況が良く解っていない初めは晴れているが、後には雪が降り出す。そして、その後の③以降は雨が降り続けるのである。昔は、幸せな心を照らし出していた光は、いつしか彼女を苦しめるものに変化していく。「有明の空を思ひ出づる」と涙が出るのである。晴れていると、楽しかった思い出を思い出してしまふ。そして、また、悩むのである。晴れた空は、彼女の心を悩ませ続けたのだった。

⑨ 雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡りたまへり。  
(蜻蛉・六・二〇四)  
の以上三点である。これはすべて浮舟の葬送の場面に描かれている。皆が騒ぎ、「物語の姫君の人に盗まれたらむ」(蜻蛉・六・二〇一)のように鬼にさらわれたかのように消えた場面に雨が降るのである。共にすごした女房や右近はもちろん、浮舟の失踪の理由を薄々は気付いていたかもしれない。しかし、訪ねてくる匂宮の使いや薫の使いはもちろん、それを使わした主人たちは真相を覆い隠す葬送という儀礼によって、浮舟の心は真相を知ろうとする努力はふたをされ、真相は闇に隠されてしまったのであった。

### 五 浮舟の心

そして、浮舟の心は空から降りる雨や雪と言ったものに隠されていく。雨や雪の中で遠くの人がぼんやりとしか見えないように、彼女の心は輪郭をぼやかし、その核となる中心部をあいまいにし、近くの場面しか見えないように自分の心を隠していくのである。雪や雨という冷たいものに心を包むことで自分の中に生まれる恋への情熱や焦る想い、恋焦がれる想いに悩む心、雨や雪はそんな熱いものを冷やしていく。その結果、表面には孤独な、悲しそうな、情熱とは正反対の気持ちで表面化していくのである。

浮舟が失踪した後の蜻蛉巻での天候は以下のようになる。

⑦ 今日は雨降りはべりぬべければ。  
(蜻蛉・六・二〇二)

⑧ 雨すこし降りやみたれと、わりなき道に、やつれて下衆のさま

では、手習巻はどうであろうか。こちらでは蜻蛉巻とは違い、浮舟自身が登場する。この場面での天候は以下のようになっている。

① 尼君ぞ、月など明かき夜は、琴などを弾きたまふ。  
(手習・六・三〇二)

② 月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひ

(手習・六・三〇二)



③ われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに

(手習・六・三〇二)

④ 月さし出でてをかしきほどに、昼、文ありつる中將おはしたり。

(手習・六・三二七)

⑤ 雨など降りてしめやかなる夜、召して、夜居にさぶらはせたま

ふ。  
(手習・六・三四四)

⑥ 雨など降りてしめやかなる夜、后の宮に参りたまへり。

(手習・六・三六二)

手習巻では、初めの頃、浮舟は記憶がないが、徐々に昔の記憶を取り戻していく。その記憶を取り戻したあたりから、天候は登場する。記憶を戻したところから、月があらわれるようになる。彼女は昔の事情を知らない者に囲まれて小野で新しい生活をはじめ。母尼君に育てられ、中將の登場により天候には月があらわれる。誰にも詮索されることのない浮舟は、心を隠すことなく、どこか影を持った女として生活が出来るのである。しかし、⑤で僧都が女一の宮に浮舟の話をする場面になると、天候は一転し、雨が降り始める。存在を知られたくない、自分のことを詮索されたくない気持ち雨が降らし、自分そのものの存在する輪郭までもほかし、隠そうとする。そして、同じように⑥で薫が浮舟の生存を知る時も、雨が降るのである。過去の人間と関わる時に空は雨を降らす。

また、この場面では⑤、⑥共に「雨など降りてしめやかなる夜」と表現している。雨が降る静かな夜、それは昔のように激しい情熱をさます必要のない心を示しているのかもしれない。浮舟巻や蜻蛉巻のころは、雨は身を隠すほど強く降り、降り止むことがないほどの雨であった。しかし、もう、薫や匂宮に会うまいと決めた心は、昔のように悩みに揺れ、匂宮を想い、恋焦がれて涙することもない。そのため、しとしとした、静かな雨が降るのである。ただ、自分の存在を隠すただけに降る。

原岡文字が述べているように、浮舟物語に出てくる天候は、雨が多い<sup>(7)</sup>。しかし、それは、原岡文字が述べるように、浮舟の罪を流すという意の雨だけではない。確かにいくつかの用例<sup>(8)</sup>については、それは一理あるだろう。自分自身の恋心を冷やし、冷静にすべてを見ようと、この悩みから抜け出そうという彼女なりのあがきでもあったと思う。

だが、それ以上に、浮舟が自分自身の心の中核を消したい、自身自身の存在をほかしたい思いの方が強いのではないだろうか。決して人に語られることのない彼女の人生は、蜻蛉巻のはじめにあったように「物語の姫君」のような一生であった。二人の貴公子に愛され、その二人を愛し、揺れ、古代の『大和物語』に出てきたように古代の乙女たちが選んだ道を自分も生きようとする<sup>(9)</sup>。物語の姫君の

ようになりたい憧れや物語のような恋、そんなすべてが自分に降りかかり、そして、物語のように自分を犠牲にし、自分を消していく。

そんな物語の姫君のような状況は月や川の水によって、時にロマンティックに、時には荒々しく描かれる。彼女の物語のような人生の中で思った心は、人々には推測の中でしか理解されないものである。決して語らず、かすかな助けを求めるそぶりを見せながらも一人で悩み続ける。しかし、その悩みを告げているはずの、彼女の涙のように心が荒れる、悲しい出来事の時に降る雨は、いつしか彼女の心を隠し、その真相を誰にも知られないようにしてしまう。すべての真相を隠し、彼女は消えていったのだ。

死者が煙となり自然に帰るように彼女は自然の中へとその身を隠していった。そのため、周囲の人々は彼女の死を「なぜめいたもの」とする。鬼にさらわれたように消えていったと誰もが思うのである。ここであまいで拡散したものだっただった浮舟の「葬送」の意味を改めて考えてみよう。「葬送」によって整理され、一段落を迎えたといった正編のあり方とは違っている。四十九日の法事や、一回忌の法事によっても整理されず、死んだという実感が全くないまま、実になまなましい「死者」として浮舟は存在していくのである。

#### おわりに

源氏物語には多くの死者が描かれる。正編の葬送は、葬送によって心が一旦整理され、人々は悲しみを受け止めているように描かれていた。そして、それは宇治の八宮、大君も同じだったのである。

死者によって源氏物語は、悲しみの連鎖を繰り返していた。その死者の連鎖は正編では、桐壺更衣・藤壺・紫上・女三宮と、宇治十帖では、大君・浮舟と死者の影を求めて繰り返されたのである。一人の死が、生者によって整理されることで次へつながっていた連鎖は、いつまでたっても整理しきれない浮舟の「葬送」によってしめくくられる。

浮舟のための最後の「葬送」はそこで終結する物語ではなかった。むしろ未来へと続く物語だったのである。生者によって整理されなかった「死者」は、物語の中で生き返り、生者の心をつかみ揺るがしていく。悲しみの連鎖をくい止めた浮舟は新たな主人公として、再び物語に戻ってくるのである。

注 (1) 岡崎義恵「死をめぐる美」(岡崎義恵著作集五『源氏物語の美』宝

文館・一九六〇)

(2) 石田穰「源氏物語における四つの死―歌語のことなど」(『源氏物

語論集」桜楓社・一九七七)

テキスト

(3) 伊原昭「源氏物語の美―死にかかわる描写をとおして―」(「語文

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳

〔日本文学〕一九七八・十二)

〔源氏物語〕一〇六(小学館新編日本古典文学全集・一九九四〜九八)

(4) 田中隆昭「源氏物語における死・葬送・服喪の表現」(源氏物語の探求一九八二・八)。今回は、『源氏物語 歴史と虚構』勉誠社・一九九三)所収を使用している。

(二〇〇六年 卒業 学習院大学大学院博士前期課程一年)

(5) 紫上の葬送場面の煙も「いとほかなき煙にてはかなくのほりたまひぬるも、例のことなれどあへなくいみじ」(御法・四・五一〇)と大君と同様にはかない煙として描かれている。また、大君同様に、臨終までの長さと同終後の長さがきわだつ。そのような点を考えると、大君と紫上の死の描写は類似しているといえよう。

(6) 神田龍身「源氏物語の性の迷宮へ」(講談社・二〇〇二)

(7) 原岡文字「浮舟」(『源氏物語講座2 物語を織りなす人々』勉誠堂・一九九二)

(8) 匂宮との密会場面後にある、雪の描写、「風もことにさはらず、垣のもとに雪むら消えつつ、今もかき曇りて降る。」(浮舟・六・一五一)や、「雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いとど山路思し絶えてわりなく思されければ」(浮舟・六・一五七)といった雨描写には、罪を流すという意が含まれる。入水以前の雨は滅罪の要素を伴うのである。

(9) 『大和物語』一四七段、生田川に、二人に愛される者の話が、また一五〇段、猿澤の池に入水自殺する采女の話がある。これらの先行説話と浮舟物語との共通点については、原田敦子の『古代伝承と王朝文学』(和泉書院・一九九八)に指摘がある。